



消え失せました

おいしいうどん

「あー、長門さん」

「なんでしょっ?」

「俺は生徒会の人間なんだけど、文芸部のことで相談が」

「はい」



「文芸部の部室なんだけどね、今学期末までに荷物を片付けて、鍵を返してくれないかな?」

「えっ……なんでですか?」

「今度の部長会議で話し合う予定なんだけど、アマチユア無線部の方が人数も多いし、実績もあるから、彼らに部室を渡そうと思って」

「そ、そんな急に……。ま、まだ決まってる……わけじゃないんですけどね。」

「でも、文芸部は実績もないし、部員も少ないし、ほぼ確定だよ。アマチュア無線部は大会も出てるしね」



「アマチュア無線部って……大会あるんですか？通信するだけじゃないんですか？」

「あるよ。文芸部だって、本を読んでいるだけじゃないでしょう？」

「……………はい」

「……………」

「……とにかく、お願いね」

俺はそこで一息ついて、

「でも、方法がないわけではないけど」と、小さく言った。



「方法……あるんですか？」

長門が食いつく。

「長門さんの心掛け次第だけど」

俺が議題にあげないようにしてあげてもいいよ。

部室の件を来学期までなら先延ばしにできる。

もちろん、その間に部員を増やすなり、実績を作るなりしてもらっけど」

「心掛けて……」

「セックスしよう、俺と」

「……えっ」

長門が固まる。



「前から可愛いと思ってたんだよね、長門さんのこと」

嘘ではない。髪型や服装、洒落つ気のないメガネのせい、とことん地味に見えるが——素材はいいと睨んでいた。

「……その……えっと……」

「一回だけでいいよ。もちろん、写真を撮ったりはしない」

「えっ……………あ、あの……………」

「強制はしないよ。でも、今学期中に文芸部が、アマチュア無線部以上の実績を上げるのは難しいだろうね」

「はっ……………」



「俺もさ、本当は長門さんみたいな可愛い女の子には、便宜を図ってあげたいけど——」

それだと、アマチュア無線部に悪いじゃん。

これは俺の罪悪感を減らすための行為って考えてよ。

長門さんが俺を懐柔して部屋を守ったって事実を作ること、

俺と長門さんで罪悪感を半分こしようってわけ。

俺がただ、優しくしたただけじゃあ、長門さんには罪悪感ないでしょ?」

罪悪感を分かち合う——このフリーズだけで、セックスへの障壁は格段に下がる。性欲という目的を二の次にしてやるだけで、この手の女は揺らぐ。しかも、褒められなれていないこのタイプは、可愛い、セックスをしたい、という言葉にも弱い。自分が認められたと思うからだ。



長門はたっぷり間を置き、
「か、考えておきます」と、答えた。

「じゃあ、決まったら、LINEに連絡して。
このまま部室がなくていいと思うなら連絡しなくていいから
俺はそう言って、その場をあとにした。」

翌日の昼休み、長門から連絡が来た。
俺とセツクスをすることに決めたようだ。
ここからが勝負だ。このセツクスで、良くしてやれば次に繋がる。
家で待っていると、インターホンが鳴った。
ドアを開けると、長門がいた。

「お邪魔します」

長門は小さく頭を下げる。
「入って」
俺は長門の肩を抱き、中に招き入れた。

緊張しているようだ。



俺は長門をソファに座らせると、「ちよつと、ゲームでもしようか」と、声を掛けた。

「えっ?」

長門はすぐにセックスをしようと思ったようだ。その方が手軽だが——それじゃあ、次に繋がらない。俺の目的はこの女と一回切りのセックスすることではない。こいつを俺の便器にすることだ。俺は飲み物と菓子を用意し、誰にでもすぐできるようなテレビゲームを準備する。



——それから、一時間ほど、ゲームや会話を楽しんだ。特に共通の話題はないが、こういう女との会話を弾ませるのは簡単だ。ただ、こいつのことを聞き出してやるだけでいい。人間は誰だって自分のことを知ってもらいたいという欲求を持っている。しかし、大人しいやつは、話したときの相手の反応が不安で話せないのだ。だから、自分はあなたの話を楽しむ人間ですってことを、きちんとかんがえれば、この手の女は自分のことを、ぺらぺらとしゃべり出す。あとは適当に聞いてやるだけでいい。

この一時間で、すっかり、長門の緊張は解けたようだ。長門は嬉しそうに笑っている。自分が脅されて、セックスを強要されている立場だということを忘れたかのように。



ふと会話が途切れたタイミングで、俺は長門の髪を撫で、キスをした。

「じゃあ、そろそろエッチしようか？」

「はい……」



「まずは、一緒にシャワー浴びよう」

「えっ！？」 「一緒に……ですか」

「そっだよ。いいから、いいから」

俺は長門の手を掴みバスルームに連れて行く。
言葉には否定的なニュアンスがあっただが、
長門は俺の手を拒否する素振りを見せず、素直についてきた。

俺は長門の服をはずしはずすと脱がせていく。

「は、恥ずかしい……!」

長門は顔を真っ赤にしながら言った。

「そう、可愛いよ」「
俺は長門を抱きしめ、キスをして、俺も服を脱いだ。



長門の視線が俺の半勃起ちんぽに向く。
俺はそれを無視するように、浴室に入り、
シャワーのノズルを捻り、お湯を出す。
「じゃあ、洗ってあげるよ」

「い、いいです！ 自分で洗います！」

長門は手をぶんぶん振る。
「いいから、任せて」

俺がやや乱暴に抱き寄せると、
長門は手を振るのをやめ、まんざらでもなさそうな顔をした。



俺は手の平でボディソープを泡立て、
長門の腿から脇腹にかけて、指の腹で軽く撫でるように、手を這わせる。

「んっ」

長門の体は小さな声と共に、ピクリと揺れた。
今度はふくらはぎから、ももの裏を通り、尻、背中と撫でていく。

「はぁ……ん」

長門が甘い声を吐く。彼女もノって来たのだろう。



次に俺は、キスをしながら、脇腹の少し上の肋骨辺りから撫でる。
そして、腋の下から肩に手を回し、
そのまま、手の方まで撫で降りし長門の手を握った。

俺はペニスを長門の腹におしつけるようにして、
密着し、ただのキスからディーブキスに移行し、長門の口腔内を舌でまさぐる。



「ちゅ……んぱっ……じゅ……」

長門も俺の舌に舌を絡めてくる。動きがぎこちない。俺は更に、長門の体の隅々に手を這わせていく。

「はぁ……んっ……あっ」

俺に触られる度、長門は体を小さく反応させる。だが、まだ秘部や胸は触らない。



それから、数分間、愛撫とキスを続け—
遂に俺は長門のマンコに手を伸ばした。

「あっ……はあはあ……んっ……」

長門は俺の肩を掴み、秘部への快樂に耐えている。

「いっ……んっ……」

長門は甘い声を漏らしながら、俺の手を受け入れる。
彼女は、決して、愛撫する俺の手を止めようとはせず、ただ、快樂を愉しんでいる。



「んんっ！ んっっ！」

長門の声が大きくなる。俺が更に、愛撫を続けると――

「あっああああ！ んんんんんんっっっ！」

喘ぎ声と共に、長門の膝から力が抜けた。絶頂に達したのだろう。長門は、俺の肩を掴む腕の力だけで、なんとか立っている状態だ。「そろそろ上がるうか」と、俺は長門を抱きかかえた。

「うん」

そして、俺は長門についた水滴をバスタオルで拭いてやり、彼女をベッドに誘った。



「はあはあ……はあ……」

長門は口からよだれを垂らし、虚ろながらも蕩けた顔をしている。
今日はこの程度にしておくか。
イカせまくるのは楽しいが……やり過ぎると逆効果だ。

俺は射精するため、ピストンを早くする。

「出すぞ」

俺は長門の体を固定し、ペニスを奥の奥まで差し込み、
ザーメンを長門の中に流し込こむ。



「あああああー！ あついー！ なかが……あついー！」
俺は最後の一滴まで、中で出し切るよう、
この姿勢を維持し、射精が終わるのを待つ。

「はあ……んっ！ あー……、ああ……んっ……！」

長門は俺のちんこの脈動を楽しむかのように、
うつろした顔で俺のザーメンを膣で受け止めきった。
俺がちんぽをまんこから抜くと、

「んっ……あっ！」

その刺激だけで長門は最後の絶頂に行き着いた。



俺は約束通り、文芸部の部室の件を議題に上げなかった。
約束を破る意味もないし。
それから数日後、長門が俺を訪ねてきた。

「あの……この前はありがとうございました」

「いいよ、いいよ。それに、ありがとうは変だ、俺たちは共犯者なんだから」



ついに、長門が俺に話し掛けてきた。
あのセックスが忘れられなかったのだろう。
もうちよつと早く話し掛けてくると思ったんだけどな。
どうやら、俺の予想よりつも引つ込み思案の女のようにだ。

「えっと……その……この……」の……で、お礼がしたくて」

「お礼？」

「また……おうちにお邪魔してもいいですか？」

渡したいものがあります……それに、
また……一緒にゲームしたいです」

「うん……じゃあ、バレないようだね」

「はいー」



長門は俺の言葉を聞くと、嬉しそうに去っていった。
俺の家まで来れば、またセックスできると思っているのだろう。
可愛らしいところがあるじゃないか。
お礼にセックスさせてあげるとか言い出して、
プライドを守ろうとする女とは大違いだ。
やはり、俺の見立て通りだ。

俺は長門が家に着くなり、
彼女をベットに押し倒し服を脱がせた。

「えっ……その……ちよっと……ダメだよお」
長門はゲームをしたい、なんて言っていたが、
こいつのしたいことはセックスだ。
それを間違えてはいけない。

女をいなりにするには、女の期待に応じてやることが重要だ。
むやみに自分の意志を押し通すことは——間違いだ。
自分の意志と同じことを女が期待するように
調整していくことが大切なのだ。
現に長門は口では否定の言葉を口走ったが、
拒否する素振りを見せず、服も素直に脱いだ。
俺はいきなり、長門のまんこに指を突っ込み愛撫を開始する。
長門のまんこはすでに、とろとろの愛液で満たされていた。
俺どのセックスへの期待が彼女をこうさせたのだろう。



「誰のおまんこを？ どんな風に触りたいの？」

「私のおまんこを……やさしく……気持ち良くして欲しいです」

俺は長門の「マン」を愛撫する。
だが、長門は物欲しそうな顔で「こちらを見てくる。」

「あつ……んっ……入れて下さい」

「指？」

俺は膣肉を掻き分け、長門の中を刺激する。

「んんっ！ 気持ちいいけど……指じゃなくて……」

「え？」

「おちん……ちんを」



「もうちよつと、入れたくなるような言い方してくれよ」

「どした？」

俺はわざと長門をイカせないように、
じわじわと快感を高める——焦らしの愛撫を続ける。

「私のぐちよぐちよおまんこに、
あなたのおつきいおちんぽを入れて下さい！」

長門は顔を真っ赤にして言った。
そして、俺は隠しておいたスマホで録音していた今の言葉を再生する。

「私のぐちよぐちよおまんこに、
あなたのおつきいおちんぽを入れて下さい！」

長門は耳まで真っ赤になる。

「ダッ……ダメッ！ 変……変！ 変になっちゃっ！
気持ちいい！ 気持ちいい！ 気持ちいいよお……！」

長門は体をくねらせ、全力で嬌声を上げる。

「ああああん！ あっあ……っ！」

長門は「際大きな声を上げて、激しくイクと、ぐったりとした。

だが、俺はピストンをやめない。

「おっ……あ……んっ」

長門は小さく痙攣しながら声を漏らす。絶頂が続いている証拠だ。
それから、俺は、二度ほど長門をイカせたのち、
長門の中にしこたま射精した。

射精を終え、長門のまんこからちんぽを抜くと、精子がどろりと垂れる。

「気持ち良かったよ」

俺が長門に寄り添い、声を掛けると、長門はほんの少し微笑んだ。



——それから、週に二、三回長門とセックスをするようになった。
長門に俺のチンポの味を覚え込ませているところだ。
長門はセックスの回数を重ねても、増長したり、
彼女面したりしないところが楽でいい。

そんなある日、朝倉という女に呼び出された。
確か文芸部にいる女だ。よくは知らないが。



「あなた……長門さんを脅したでしょ」

「……？ なんのこと？」

半分事実だが、もちろん、とぼける。
予想するに、こいつは長門の友達——いや、親友だろう。
友達程度では脅している相手に、文句を言いに来たりはしない。

「長門さんが、あなたの家に通っていることは——分かっている」

「それは事実だけど……もちろん、脅してなんていないよ」

「アマチュア無線部——そして、部室のことだよ？」

そこまで気付いているとは。中々やる女だ。

この件は生徒会でも俺だけの仕事だから、誰も進捗を知らないはずだ。そして、何も進めずに握りつぶしたのだから——バレるわけがない。

きつと、生徒会の議事録と、ほかの部活動の状況から類推したのだろう。



「そのことで何度か長門さんと話し合っているうちに仲良くなったんだ」

「嘘！ そんなこと……あるわけない！」

それに、あなたの素行だって、分かっているのよ？」

「素行？」

とぼけてみせたが、生徒徒を食い荒らしていることを言っているのだろう。少々やっつかいかもしいれない。あくまで“少々”だが。

「長門さんに手を出さないで！」

朝倉は今にも俺を殺しそうな目で睨んできた。

その瞬間、俺のチンコが硬くなった。

実は、こういう気の強い女は好物だ。こういう女を堕とすのは——快感だ。

念のために録音しておいた長門と遊んでいるときの音声でも聞かせてお帰り願おうかと思ったが、もう少し付き合っってやることにした。



「じゃあ、君が長門さんに、俺に会わないよう言えばいいんじゃないかな？俺が彼女を呼び出したことはいないぜ。」

長門さんが俺の家に来るんだ——

それに、アマチュア無線部と部室の件で長門さんを脅したんだとしたら、未だに長門さんが俺の言うがままってのはおかしいだろ？

会議はもう終わったんだし、来学期まで文芸部は安泰になったはずだ」

「……写真でも撮って、替わってるんじゃない？」

「そんなこと、しないよ。」

俺のこと調べたみたいだし、知ってるんだろう？

俺はそういうことしないってこと。

それに、長門さんとは仲良くやうてるだけだよ」



写真を撮る——これは脅す際には便利だが、逆に弱点ともなる。

物的証拠を残すのは悪手だ。安易に写真に頼るのは雑魚のすることだ。

それに力での服従は本当の服従ではない。

相手が俺の望むことを自然にするようになる状況こそが——真の服従だ。

朝倉は黙る。必死に反撃の一手を探している顔だ。

朝倉は黙る。必死に反撃の一手を探している顔だ。

「まあ、君がそこまで言うなら、長門さんと会わないようにしてもいいよ」
俺は、笑顔を作り言った。

「えっ……」

朝倉の顔が緩む。これが俺の攻撃だとも気付かずに。

「その代わり、君が俺のセックスの相手をしてよ」



「卑怯者」

朝倉は俺を睨み付ける。

「冗談だよ、俺はあんたみたいになんか、気が強くて、芯がある女性が好きなんだ。
だから言うことを聞くよ。長門さんとはもう会わないことにする」

「………本当？」

「ああ、本当だ。それに、どんな形にせよ、敵は作りたくないんでね」

——翌日。
鬼のような形相の朝倉が、また俺のところに来た。
予想通りの展開だ。

「今日はごうじたの？」

「あなた……長門さんに何をしたの！」

「別に。朝倉さんが好きになつたから、
もう会えないって伝えたただけけど？
言っただろう？ 君のような女性が好きだから、言うことを聞くって」



もちろん、俺はこんなことを言つたらどうなるか、分かつてやった。
親友が自分の好きな人を奪つたという状況に陥つた長門が、
どつという行動を取るか——完璧に予想してこつ伝えた。

「……」

朝倉の顔から少し力が抜けるのが分かつた。

長門が自分の意志で俺に会つていふことを理解したのだろう。

いや、聡い彼女のことだ、そんなことは、とつくに分かつていたはずだ。
その事実を認めたくないという気持ちを繋ぎ止めていた、
最後の一点が崩壊したといつたところか。

——無理に脅さなければ、こつこつという状況を作ることも可能つてわけだ。

「君の望み通りだろう？ もういいかい？」

「このままじゃ……長門さんが……傷付いて……」

「知らないよ。それは君の責任だろう？」

朝倉は無言のまま、ぼろぼろと涙をこぼす。

泣きや済むって考えている女は反吐が出るほど嫌いだが

——この涙は本当の涙だ。

少しだけ希望をくれてやってもいいだろう。



「……そうだな、じゃあ、こうするか。」

昨日の言葉は長門さんの俺への気持ちか嘘じゃないか、
確かめようとするための言葉ってことにしよう。

もし、長門さんが俺の言葉に全然ショックを受けなかったら、

俺はきっぱり諦めようとしていたと。

で、このことが朝倉さんにバレて、

俺は長門さんに謝罪するように怒られたってストーリーはどうか？」

朝倉は泣き止み、

「……それなら……」

と、小さく呟いた。

「でも、俺がすげー悪者になるわけじゃん」

「……ええ」

「だから、俺に君を二週間ほど自由にさせてよ」

「ッ」



「君のせいで、色々と滅茶苦茶にされたんだ。」

それくらいは別にいいだろ？ 脅すっていうなら、

先に脅してきたのはそっちなわけだしさ」

「……分かったわ」

——その後、俺が長門に土下座し、事なきを得た。

長門は精神の安定を得て、

朝倉は長門にとつての恋路を破壊する悪者から——

長門の好きな相手の間違いを正した恩人になれたわけだ。

放課後、俺は早速朝倉を呼び出した。

「挨拶くらいしろよ」

「何をすればいいの？」

朝倉を俺を睨み付けて言った。可愛らしいじゃないか。

俺は朝倉の肩を抱き、

「じゃあ、最初はフエラでもしてもらおうかな」
耳元で囁いた。



朝倉の表情が陰しくなる。
だが、ほんの少し頬に赤みが差したことも、俺は見逃さない。

「……………あなたの家に行けばいいの？」

「いや、今すぐヌキたいんだ。そつだな、トイレでやってもらおうかな？」

「……………そつという約束だからね。なんでも言うこと聞いわよ。二週間はね」

「ちょっと……男子……トイレなの？」

「放課後だから、そんなに人は来ない。音を出さなければ、人が来てもやり過ごせるよ」

俺はそう言っつて、朝倉をトイレに押し込み、個室に連れ込んだ。そして、ズボンを脱ぎ、ペニスを露出させる。朝倉は目を逸らしつつも、ちらちらと俺のチンポを見ている。

トイレを選んだこと、最初にフェラをさせたこと、これには理由がある。こういう真面目で固い女は、奥底では非日常を求めているものだ。だから、普通とは違う順番と場所を選び、タガを外してやる。そうすれば、自然と俺を求めるようになる。

重要なのは女の表の欲望ではなく、真の欲望を叶えてやることだ。こいつは——長門のことを心配していたようだが、それは少し違う。

もちろん、心の大部分は心配だろうが、その心配の隙間には、長門に対する嫉妬や羨望があつたはずだ。そういうところから、性欲だけを抽出してやればいい。



「しつかり、奉仕してくれよ」

「朝倉は少しの間固まっていたが、意を決したように、俺のペニスを舐めた。
初めてか？」

「初めてに……決まってるじゃない」

「でも、フエラって言葉は知っているのな」

朝倉の顔がかいつと赤くなる。

俺は朝倉の頭を撫で、

「俺の言うとおりやれ」

と、小声で伝えた。

朝倉はそれに、顔を赤くしたまま頷いた。



「ちんこの裏の付け根から先端に掛けて、舌の先で舐め上げる」
朝倉は言われた通り、舌をペニスに這わせる。

「龟头を——そうだな、飴玉でも舐めるように転がせ」
朝倉は身を乗り出し、俺に龟头を舌でこねくり回す。
俺が頭を撫でると、朝倉は逆に睨み返してきた。
こいつはこいつとこいつが可愛いな。

「じゃあ、次は全体をなめ回してくれ。玉もな。
それを完全に勃起するまで繰り返せ」
朝倉は無言のまま、俺の指示に従う。
何回かループを繰り返すうちに、コツを掴んだようだ。



「じゃあ、そろそろ啜えてくれ」

朝倉は一瞬動きが止めたが、意を決したように、亀頭を啜えた。

「唇をすぼめて、チンポを締め付けけるようにしてみろ」

朝倉は言われた通りにする。

「その形のまま、動かすんだ」

朝倉は口を前後に動かしたが、すぐに口を離してしまった。

「どっした？」

「こんなことしてたら——顎が痛くなっちゃっわ」

「長門は十分ぐらいなら余裕でしゃぶってるぞ」

「……なんで、長門さんが出ているのよ」

朝倉はまたフェエラに戻った。どうやら対抗心が芽生えたようだ。

「いっぴょー……ぬびよお……」

「いい音立ってるじゃないか」

音を指摘されたことが恥ずかしかつたのか、朝倉の顔が赤くなる。

「もう少し奥まで啜えろ」

朝倉は頭を小さく振り、拒否を示した。

既に、口の中はペニスでいっぱいだろうが、喉まで使えば無理ではない。

こうやって、ペニスの半分だけをしゃぶられていても、つまらない。

「じゃあ、こうするしかないな」

俺は朝倉の頭を掴み、俺の方へ引き寄せた。

「!? おっくん! ……じゅ……ん!」

「下がるじゃないか」

朝倉は無理矢理動かされているというのに、きちんと今までの指示を守り、しつかりと、俺のペニスを啜えている。

どうやら、少し奥まで入れるのには、すぐに慣れたようだ。

本当は根本まで啜えてほしいところだが、もう少し慣れないと無理だろう。

えづく女に無理矢理——というのはソツるが、今はその段階じゃない。

「うん……むむむ……じゅじゅじゅ……」

「いい感じじゃないか。長門よりも覚えがいいぞ」
朝倉は少しむっとした顔になり、長門への対抗意識なのか、

「うん……うん……うん……うん……」



より激しく口を動かす。更には舌も使い始めた。やはり覚えがいいな。
「んんんん、出すぞ」

俺はまだ満足には遠いが、そろそろ出してやるかとする。
ペニスを小さく動かして、射精の準備をし、
朝倉の口内にザーメンを出した。

「全部飲め」

俺は朝倉の口からペニスを抜いて、言った。
朝倉は懇願するような目を向けてきたが、諦めたのか、
目を瞑り、ごくりと一気にザーメンを飲み込んだ。

「じゃあな。お前は少し時間を置いてから出た方がいいぞ、
一緒にトイレから出てきたところを見られたいなら、一緒にでもいいが」

「そんなわけ……ないじゃない」

俺は恨めしそうな顔をしている朝倉に不意打ちでキスをした。
そして、目を丸くする朝倉を置いて、この場をあとにした。



翌日、俺は昼休みに朝倉を呼び出した。

「今日は何？」

「放課後——文芸部の部室で」

「待って、それは無理よ。長門さんも来るし……」



「あんだなら、長門を来ないようにさせることができるだろ？」

「でき……なくはないけど。それに音だつて」

「俺は声出さない、出すとしたらお前だけだ」

「……分かったわ。でも、どうしても無理な状況だったら……お願い」
朝倉は俺に手を合わせ、頼み込む。

「さすがに俺もこれからの生活を棒には振りたくないから、
そんな無茶はしないよ。でも——」

俺は言葉を止め、朝倉のスカート裾からパンツに手をつ突っ込んだ。

「お前はそういうこと、してみたいんだろ？
じゃなきゃ、こんなに濡れない」



朝倉は、ほとんど俺を突き飛ばすようにして距離を取った。

「反抗的だね」

「ぐ、ごめんなさい……いきなり……だったから」

「じゃあ、放課後ね」

昨日のトイレでのフェラプレイで目覚めたのだろう。

しちやいけないことを、しちやいけない場所でする——。

真面目な朝倉の価値観を覆すには十分な出来事だったはずだ。

— 放課後。俺が文芸部の部室に行くと、朝倉が一人で待っていた。

「待たせたね」

俺は朝倉の髪を撫でつつ言った。



朝倉は露骨に嫌な顔をする。

俺の思い通りの行動をしてくれる——可愛いやつだ。

こういうタイプは、俺への嫌悪感が強ければ、強いほど、セックスの快楽で俺のとりこになる。

「じゃあ、脱いでか」

朝倉は目を逸らすと、抵抗したりせず、無言で服を脱ぎ始めた。

「脱いだわよ」

俺は全裸になった朝倉を抱き寄せ、キスをした。
そして、朝倉のマンコをいきなり手で責める。

「んっ……！」

朝倉は突然のことに、声を上げたが、
すぐに声を押し殺すように我慢し始めた。



「やっぱ、濡れてるじゃないか」

俺は朝倉の愛液にまみれた手を見せつける。

「そんなの……生理現象………どっぴり」

「俺が触ってから濡れたなら——そうかもしれないけどね」

俺は朝倉を立てさせたまま、脚を開かせた。
朝倉が不安そうな視線を俺に向ける。
俺はその視線を無視し、朝倉の脚の間に顔を突っ込み
——クンニを始めた。

「んっ！ んんっんっ！」



突然の刺激に朝倉は声を上げたが、
すぐに自分で自分の口を押さえて、我慢し始めた。

俺は朝倉の包皮の間に舌をすべりこませ、クリトリスを刺激する。
途端、朝倉の体が、ビクンと揺れた。
俺は休まずに刺激を続ける。
その度、朝倉の体が細かく痙攣する。

朝倉のマンコからは、愛液が湿らせるを通り越し、滴り始める。朝倉が身をよじらせ、快楽から逃れようとする。だが、俺は脚を押さえつけ、尚もクンニを続ける。俺が舌を細かく動かすと、朝倉の体が一際大きく撥ねた。最初の絶頂を迎えたのだろう。だが、やめない。徹底的に——やる。俺はそのまま、責めを続け、七回朝倉をイカせた。



あれだけ反抗的な光を灯していた朝倉の瞳は、だらしなく蕩けた。口からは、荒く、甘い吐息を漏らしている。俺はズボンとパンツを脱ぎ、チンポを露出させた。それを見た朝倉の目が色めきたつ。もはや、新たな快楽への期待を隠そうともせず、うつとりした目で、いきり立ったペニスを見つめていた。

俺は、朝倉を机に寝かせ、亀頭を朝倉のマンコにこすりつける。

「んっ、じ……焦らさない……だよ」
朝倉が甘い声で懇願する。

俺は朝倉の望み通り、ペニスを奥まで一気に差し込んだ。

「んんんん……」

朝倉が押し殺し殺しつつも高い声を上げる。

俺はゆったりとした速度で挿入を開始する。

朝倉が快楽を押し殺し殺そうとする度に、彼女の胸が大きく上下する。



しばらく、ピストンを続けたところで、俺は動かし方を変え、膣壁にペニスをこすりつけ、決るように動かし始めた。

「あー！」

朝倉が思わず声を漏らした。

「声が出るぞ」

朝倉は目を瞑り必死に声を我慢する。



俺は本気を出し、朝倉の弱点を責める。

「ッ！ んっん！」

朝倉の体が跳ねる。また、イッたようだ。目が虚ろだ。

俺は、更に腰をねちつこく動かし、朝倉の快樂の度合いを上げていく。今回はとことん、快樂を与えることが重要だ。

圧倒的な快樂は——朝倉の俺への嫌悪感を逆転させるはずだ。

俺はその後、三十分以上かけ、朝倉を何度も何度もイカせ、彼女の膣内に射精した。

朝倉は中出しに対する不安など感じていないだろう——そういう顔をしている。

最早、快樂を通り越し、幸せといった感じの表情だ。意識は朦朧としているようだ。

「じゃあ、またな」

俺は朝倉を放置し、部室を出た。



「ねえ、あんだ」

ある日、下校しようとして学校の門を出たとき、声を掛けられた。
声を掛けてきたのは、うちのものではない
——確か近にある学校の制服を着た女だった。

「なんででしょう？」

「二日前、部室で朝倉さんとセックスしてたわよね？」



この女は、往来だというのに、
堂々と『セックス』と言いやがった。恥じらいがないのか。

「……あなたは誰ですか？」

「私は涼宮ハルヒ。聞きたいんだけど」

——あなたとセックスすれば、あんな風になるの？」

「ちよつと場所を変えよう」

学校の前で『セックス』を連呼する女と話しているのはまずい。
俺は涼宮とかいう女の手を引いて、人気のない場所まで移動した。

「私もね、オナニーはするし、イッたこともあるけど、
あそこまでイッたことはないの。
あなたとセックスしたら——ああなるの？」



「相性はあると思うけど、オナニーよりは気持ちよくさせられるよ」

「じゃあ、うちに来て。セックスしましょ」

「いや——」

と言つ俺を無視して、この女は俺の手をぐいぐい引いて歩き始めた。

俺はこつそりと涼宮とかいう女の写真を撮つて、

朝倉に送り、メールでこいつの正体を聞いた。

朝倉の情報によると、どうやら危険はなさそうだ。

少し流れに身を任せてみてもいいだろう。

容姿はどちらかといえば、俺のタイプだ。

ハルヒとかいう女は家に着くなり、制服を脱ぎ捨てた。引き締まっているが、出るころは出ている——所謂エロい体だ。

「さあ、どうすればいいの？」

「いや——順番ってものが」

「ここはハルヒの自室ですらなく、リビングだ。」

「そついうのには興味ないわ。私はただ、気持ち良くなりたいの。人生を破滅させそつな言葉を簡単に吐く女だ。」



しかし、これは中々に難しい相談だ。

「快樂は体だけで産み出されるものではない。精神が伴ってこそだ。」

「ねえどつしたの？ やるの？ やらないの！？」

ハルヒは俺の胸ぐらを掴み、睨みながら言った。

「すんぽ」

俺はハルヒの手を解き、服を脱ぎ始める。

こつなれば、何も分からない以上、テクニツク勝負だ。」

俺はかばんから朝倉に使おうと思っていた自隠しを取り出す。

「……何それ？」

「自隠しだ。これを着けてもらう」

「p...u...h...o...」

「お」のシノマツを履いて、楽しんでくた。マッサージをする」

「マッサージっ。私が言った気持ちおもしろいものは、

そのおもしろいじゃないだけ」

「おもしろいおもしろいおもしろい」

「まあいいわ。でも気持ち良くなかったら、承知しないからな」



俺はハルヒをソファに座らせ、足裏をボールペンの裏で押し込む。

「つつ……ちよつと……何……しているの？」

人間の感覚において触感の占める割合は少ない。普段、人間は、視覚や聴覚、様々な感覚を総合して物事を判断している。だから、一つ感覚を奪われるだけで――何が起きているか分からなくなる。足裏のような感覚が鋭敏でない場所なら、特に。

「んんっ！ ねえ……ちよつと――何!?!」

「何もしていないけど?」と、俺は嘘をつく。

「えっ? なんか……感覚が」

焦るハルヒを横目に、俺はハルヒの恥裂を小指の爪で軽く擦る。

「ひっ!」

俺はそこで、イヤホンをハルヒの耳に装着し、適当なノイズを流す。



「ひゃ……………はぁ……………はぁ……………ふう……………ふい……………」

五感の一部を奪われた上での、性感帯の刺激に加え、日常ではあまり受けないタイプの刺激を与え続けられ、ハルヒの意識は朦朧としていることだろう——「種の催眠状態だ。俺はハルヒのイヤホンを外し、」
「準備が終わったから、これから、気持ち良くっついでいっくと、伝えた。」

「はぁ……………はぁ……………んう……………」

ハルヒはほとんど返事になつていない声を出す。俺はハルヒのマンコに指を入れ、いつも通りの愛撫を開始する。だが——いつも通りなのは俺の指の動きだけだ。

「ああああああ………ひひひひひひ………いいい、いや、ああああああん………」
反応は激烈だ。

ハルヒは勝手に妄想を膨らませて、勝手に快楽を増幅している状態だ。

「なんて！　なんて！　ひうんんんんん………んんん、あ、あ、あ、あ………」

俺が刺激を加えると、ハルヒは嬌声を上げた。



「あああああ！ 何これえええ！ 知らない！
おおおつ！ こんなのおおお！ 知らないいいい！」

ハルヒは大袈裟な声を上げつつ、体をビクンビクンと痙攣させる。
俺は、ハルヒの声には取り合わず、淡々と責め続ける。

「んんんん！ あ—————っ—————！」

ハルヒはほとんど叫び声のような、喘ぎ声を上げ、何度目かの絶頂を迎えた。
そこで俺はハルヒのマン「にチン」をあてがう。

「えっ……なに……」

「これから本番だ」

「本……番……？」

俺は少しずつチン「をハルヒのマン」に押し込む。

「な、な、何入れてるの……？」

「チン」だよ



「おおっおおっおおっほ………んっきい………ひうん………」

俺がペニスを中まで入れると、ハルヒは獣のような声を上げた。
「動かすぞ」と、俺はゆつくりと腰を動かし始める。

「あっ………あんっ………すっき………いっ………いい………あっ………っっお………」

俺は膣壁を抉るようにペニスを動かし、ハルヒの膣内の弱点を探す。

「あっ………あっ………あっ………あっ………んっほっ………」

俺はフイニシツムに向けて、腰の動きを早くする。

「おほっ、おっ、ああああん………いっ、ひうん………ふーふー………ああああんっ………」

ハルヒが更なる絶頂を迎えたところで、俺は膣内に射精し、終わらせる。

「ん………ん………いっ………」

「あ………はあはあ………」

「………いやら、答えられないようだ。」

「部屋まで運んでやる」

「この家の間取りから考えると彼女の部屋は二階だろう。
俺はお姫様抱っこでハルヒを二階の部屋まで運んだ。」

「じゃあな」



朝倉と約束した二週間の最後の日。朝倉はいきなり土下座をした。

「これからも……あなたとセックスがしたいです。させて下さい」

関係が続くのは予想の範囲内だったが、土下座されたのは予想外だった。

「土下座はやめてくれよ」

「……………あなたには長門さんに土下座させちゃったし。

申し訳ありません……全部、私のせいなのに」



「いいよ。水に流そうぜ、そんなことは。これから抱いてやるよ」

俺はいきなり、朝倉のパンツに手を突っ込み、割れ目に指を滑り込ませた。すでに、「マン」がトロトロになっている。

「んっ……はい、ありがとうございます」

朝倉は顔を赤くして、頷いた。

このまま一発ハメたいところだが、ハルヒとの約束があるので、キスだけをして、俺は部屋をあとにした。

「遅いわ！」

俺の家の前で待ち伏せしていたハルヒが怒っているのか、嬉しいのかよく分からない顔で言った。

「悪いな」

俺は玄関の鍵を開け、ハルヒを部屋の中に招き入れた。そして、扉が閉まると同時に、ハルヒを抱きしめ、彼女のぷりんとした尻を驚づかみにしながら、キスをした。



「ぬちゅ…………ちゅ…………ぶはっ」

ハルヒは口を離すと小さく息を吐いた。

俺とハルヒは部屋の中に入り、荷物を置き、ソファに座った。

「ちよひん聞かすわ」

「なんだ？」

「古泉君がね、あなたと会ったのをやめた方がいいとか言ってきたの」

「ほう」

古泉というのは確か、ハルヒと仲のいい男子だったはずだ。いつも金魚の糞みたいにくっついてる男——というのが、俺の彼に対するイメージだ。つまり、今までわがままなハルヒのために奴隷の如く貢いだのに、ハルヒを俺に寝取られた可哀想な男というわけか。ご愁傷様。

「で、私は、なら古泉君が私を気持ち良くできるの？ つて聞いたわけよ」

「はあ」

なんつーことを聞くんた……。

「それで、まんこを少しだけ触らせてあげただけで、全然ダメね」

「触らせたのか……」

「気持ち良くないどころか、気持ち悪いの」

「……………」

それはそうだ。気持ち良くないだろうなと思いつながら触らせたって、気持ち良くはならない。もちろん、その落差を使う方法はあるが、それ相應のテクニクがいる。物理的なテクニクもさることながら、心に気持ちいいかも知れない疑念の亀裂を入れるテクニクが重要だ。きつと、古泉という男はただハルヒのまんこを愛撫したのだろう。俺の所有物に触れたことは許し難いが、悲惨なので、見逃してやろう。

「もし、古泉君の、ちんぽが大きかったら、入れてみたいなと思つて、見せてもらったんだけど——これくらいしかないのよ。小さすぎてあり得ないつて言つてこつち来ちゃつた」



ハルヒはケタケタと笑い出す。

「おつ……」

男のハートを完全に打ち砕く行為だ……。恐ろしい女だ。それに、彼女が手で示した古泉のペニスの大きさは、平均くらいだ。小さいわけではない。俺のが大きいだけで、しかし、俺のサイズを基準にこれからの人生を過ごすとすると、ハルヒの人生は悲惨なものになるだろう……。知つたこつちやないが。

「じゃあ、早速セックスしましょう！」

ハルヒは服を脱ぐ。
しかし、靴下を脱ぐ時間がもつたいなかったのか、靴下を穿いたままだ。

「さっばい気持ち良くしなさいー！」

ハルヒはいきなり、まんぐり返しの姿勢になり、まんこを広げた。
本当はもつと主導権を握って、
調教したいところなのだが、「さっばい」でせぬ。
さすがに主導権を取ることにはできぬ。
まあ、主導権を取るための「ムク」は揃っている。
今はただ、こいつの望みを叶えてやるわ。



俺は腰を打ち付けるように、何度も何度も奥までペニスをねじ込む。

「おっっん ほっほっほっ！ あああああああん！」

ハルヒは無様なアへ顔を晒しながら、イク。
だが、俺はそこでやめたりはせず、ハルヒを責め続ける。

「おっほ！ んぎいいい！ おんっおっ！ あああああ！」



この難点は俺が疲れるということだ。

ハルヒが通常のシチユエーションに、
まったくときめかない女だから、仕方ないのだが。

「そんな出すぞ」
俺は腰を小刻みに動かし射精の準備をする。

「あ……」

ハルヒの意識は既に朦朧としているようで、気のない声を漏らすだけだ。
こいつは、いつも最後はこうだな。

「ん……あ……あ……んっ」



射精の余韻で脈動するチンポにあわせ、ハルヒが声を出しながら細かく痙攣する。

だが、やはり満足感が足りない。

こんなことなら朝倉とセックスしてから来れば良かった。

征服感にかけるセックスは退屈だ。

しかし、こいつを征服する準備は整っている。

いや、最初から整っていたとわかっていいだろう。

こいつは何故か、自分が俺の女の中で一番だと思っ

そうではないってことを、分かってやれば——征服できる。

俺が射精すると、長門は微笑んだ。
長門の前にセックスした朝倉は満足そうな顔をしている。

「ねえ……そのその入れてよ」

ハルヒが切ない声でまんこを広げる。
だが、俺はそれを無視する。
今日は、放置する日だ。こいつとするのは数日に一回でいい。



長門、朝倉、ハルヒとの4P。

この状況に持ち込むのに大して苦労はしなかった。
長門は俺に嫌われまいと、すんなりこの状況を受け入れた。
朝倉は親友と男を共有するという背德的な関係の魅力に負け、
ハルヒはもう俺のチンポなしでは生きていけないような状況だ。
三人とも本心では俺を独占したいのだから。
この状況を受けいれている。
征服完了だ。
飽きるまではこいつらを使ってやろう。